手紙が伝える 家族と戦争の記憶

～戦後77年目の夏～

ふるさとの誇り 181

まる博レポート

ボロ電に乗って　1937年

ボロ電に乗って、春に小学校に入学する進は年の離れた兄に連れられ、甲府へ降り立ちました。目にしたのは、大きなビルが立ち並ぶ、見たこともないきらびやかな街。岡島百貨店で当時めずらしかった革靴やランドセルを買ってもらい、誇らしげな気持ちになりました。孫悟空の映画を見て、生涯の大好物となるすき焼きを兄にご馳走してもらいました。

南方戦線からの手紙　1941～1945年

中国、そして米国との戦争が始まると、さまざまな物資が不足し、若い男性は戦争へと駆り出されていきました。村中の人々が万歳三唱で見送る中、兄二人もボロ電に乗って出征していきました。誰もが負けると思っていなかった戦争。戦地の兄たちと家族は何通も手紙を交わしました。手紙だけが遠く離れた家族をつなぐ糸だったのです。手紙は軍事郵便でその内容は厳しく検閲を受けるため、差しさわりのない内容が多かったものの、戦地からの手紙には兄たちの想いが溢れ出ていました。

「先日はお懐きお便り有難う御在居ました。家の人も元気の様子何寄りです。郷を遠ざかる戦線では郷土からの便が一番嬉しいですね。馬鈴薯が取れたとか養蚕が好成績だとか言便りなので昨夜は家へ帰ってお母さんのお手製の馬鈴薯をうんと食べた夢を見ました。その後でうどんを食た夢も見ました。八重子も会社に就職したとの事、何寄りです。亦進からも咲子からも便をもらいました。実に嬉しかったですね。自分も相変らず元気にてやって居りますから、まず御休心下さい。（後略）」

出征場所は秘密にされていましたが、絵が上手だった兄の便りには、目前に広がる南国の風景が山々、さざ波、ヤシの葉に至るまでていねいに描かれていました。

ボロ電に乗って　1945年

7月6日深夜、甲府が空襲を受け、8月には人類史上初となる原子爆弾が広島、長崎に投下され、多くの一般市民が犠牲となり、終戦を迎えました。

ボロ電に乗って、途中からは歩いて、中学生となった進は焼野原となった甲府に辿り着きました。両親に代わり兄たちの遺骨を2回受け取りました。遺骨を納めたという箱の中には、木札とラクガンの菓子だけが入れられていました。日本だけでなく中国や米国その他多くの国々でそれぞれの家族を失った戦争が終わりました。市内でも多くの命が失われ、家族の手元には多くの手紙が残されました。

手紙は時を超えて言葉を運び、言葉は人の心を今に伝えます。

「八重子や進もお父さんお母さんの言附を守り一生懸命勉強して下さい。さき子も三龍社で働いて居りますか。文吉兄さんもしっかりやって下さい。では又、お身大切に、さようなら」

自動車に乗って　2022年

戦後亡くなった兄たちの意思を継ぎ、進は教師の道をあきらめ農家を継ぎました。ふるさとの景色は麦畑や桑畑からスモモやブドウなどが豊かに実る果樹畑へと変わっていきました。自動車に乗って、果樹畑を抜けて、進は子どもや孫、ひ孫とともに兄との思い出が残る甲府にも出かけています。

終戦から77年目の夏。戦争を経験した人々が望んだかけがえのない日常が、日本では続いています。

文／写真　文化財課

本文中の敬称は略させていただきました。ボロ電の写真は白根町発行『夢 21世紀への伝言』より。

ボロ電は山梨交通電車線。1930～1962年まで甲府から南アルプス市域を通り、富士川町青柳まで結んでいた路面電車。
馬鈴薯（ばれいしょ）はジャガイモのこと。母の「かぼちゃほうとう」はとても美味しかったことを進さんは今でも覚えています。